

【報道関係各位】

2010年6月21日
Japan Partners Against Pain®

**第3回「JPAP®オレンジサークルアワード 2010」
奈良県立医科大学附属病院 緩和ケアセンター・
ホームホスピス ひばりクリニックが
最優秀賞を受賞！
～がん診療拠点病院と在宅診療の連携を評価～**

正しい痛み治療の普及と理解の浸透を目指し、医療従事者が設立した非営利の任意団体 JPAP® (Japan Partners Against Pain® 代表世話人：JR 東京総合病院 院長 花岡 一雄)^{*1}は、6月17日(木)に第3回「JPAP®オレンジサークルアワード 2010」の最優秀賞、優秀賞、特別賞を発表しましたことをお知らせいたします。

「オレンジサークル^{*2}」とは、“がんの痛みを取り除くことで、患者さんが、がんそのものと取り組む気力や体力を得る”という考え方を実践する医療チームの活動をサポートする JPAP®の取り組みで、医療チームからの登録申し込みに基づき JPAP®が認定します。その活動の一環として、緩和ケア活動の院内・院外での認知度をさらに高め、よりよい治療の普及と発展に寄与するべく、昨年に引き続き第3回「JPAP®オレンジサークルアワード 2010」を実施いたしました。

【最優秀賞】

最優秀賞は奈良県立医科大学附属病院 緩和ケアセンターとホームホスピス ひばりクリニックに贈られました。同病院では年間約 3,000 名のがん患者さんが治療を受ける中、緩和ケアチームの介入件数は約 10% の 300 名、そのうちチームが看取る患者数は約 100 名にのぼります。近年の化学療法の進歩に伴い、“最期のとき”の直前まで積極的ながん治療が可能となった結果、患者さんやご家族の心の準備が整っていないまま、そのときを迎えざるをえないことが多くなりました。同病院では早期からの緩和ケアの必要性を痛感し、近隣地域の在宅診療施設の協力を得て、県内での啓発活動を開始。杉山正智院長(ホームホスピス ひばりクリニック・奈良市)が設立した奈良在宅ホスピス研究会との強い連携のもと、「NARA is One TEAM」をスローガンに県内の医療機関や在宅関連施設をひとつのチームと位置づけて、早期からの緩和ケアを広める活動が高く評価され、今回の受賞となりました。

—奈良県立附属病院 緩和ケアセンターとホームホスピス ひばりクリニックのコメント—

「いまは県内の施設での連携にとどまっていますが、将来的にはこれを近畿地方、そして日本全国に広げていきたいです。そして全体がひとつのチームとなって、日本中に緩和ケアが広まっていくことを強く願って、これからも活動を続けていきたいと思っております。」



【優秀賞】

優秀賞は医療法人白十字会 佐世保中央病院 緩和ケアチームに贈られました。同病院は慢性期、回復期、老人保健施設、通所施設、特別養護老人福祉施設、介護付有料老人施設などを有する法人組織の中で、急性期医療を担う機関です。1997年に終末期の患者さんの肉体的・精神的苦痛に対する緩和を目的として、緩和医療研究会が設立されました。症例検討を中心に研究会を続けるも、緩和ケアを取り巻く医療は急速に発展し、より深い知識が求められました。そこで2005年には認定看護師が緩和支援課の専従看護師となり、研究会の年間計画を立案。ガイドラインの整備などに着手し、徐々にチームが形作られてきました。また同年より、亡くなった方へのケアを振り返ることで、今後のケアに活かすための「デスカンファレンス」が始まりました。2007年には、ご遺族や知人の方を対象にした「緩和家族会」をスタートしました。このように「みんなで育てあう緩和ケアチーム」のポリシーを貫き、患者や家族を中心に共に歩んできた活動が評価されました。

—医療法人白十字会 佐世保中央病院 緩和ケアチームのコメント—

「受賞できるとは思っていませんでした。西九州で十年近く緩和ケアに携わってきましたが、周りの理解、協力もあり、その成果がこのような形で現れたことを大変うれしく思っております。これから、認定看護師などの独自のアイデアと新しい発想とともに、もっと緩和ケアを広めていこうという気持ちになりました。」



【特別賞】

特別賞は札幌南青洲病院 緩和治療科に贈られました。2008年、同病院では積極的ながん治療から終末期への移行がスムーズにできるように「緩和治療科」を新設しました。がんの治療中からの積極的な緩和ケアにより、看取りまでの死亡期間、がん治療の満足度、身体的および心理的状态、患者・家族・医療者間におけるコミュニケーションの度合いなどについて、臨床的な結果が報告されました。その結果、いずれの項目においても、緩和治療科が介入した患者群では、より良好な結果が得られました。このように体制を整えることで、患者さんやご家族に質の高いケアを提供でき、それを実証した活動が評価され今回の受賞につながりました。

—札幌南青洲病院 緩和治療科のコメント—

「外科で主治医をしていたとき、患者さんを（最期の）ギリギリまで治療し辛い経験を何度もしました。他の主治医に同じような思いをさせたくない、そう思い自分自身が緩和ケア医になりました。また、患者さんご家族にとっても、緩和ケアを少しでも早く始めることで、希望されるがんの治療そのものが続けられる。そう信じて、人数が少ないチームですが、緩和ケアが必要な患者さんをサポートしています。今日の受賞でいままでの活動にほんの少しですが、自信が持てました。ありがとうございました。」



JPAP®代表世話人である花岡 一雄 先生(JR 東京総合病院 院長)は、「このたび、第3回を迎えた『JPAP® オレンジサークルアワード 2010』では、3年前と比較して発表内容のグレードが確実に上がっており、活発な緩和ケアに対する取り組みが各地で始まっているように感じました。緩和ケアは決して院内だけの課題ではなく、今後は地域を巻き込んだシステムがさらに必要になってくるでしょう。その意味でも今回受賞された施設のように、病院内にとどまらず病病連携、病診連携を含めた広い緩和ケアのサポートシステムが重要になってくると考えます。」とコメントしています。

現在、がんは日本人の死亡原因の1位であり^{※3}、国民病と言っても過言ではありません。したがって、がんの痛み治療は、多くの日本人が直面するきわめて重大な問題です。また、2007年4月には「がん対策推進基本法」が施行され、治療の初期段階からの緩和ケア実施が、重点的に取り組むべき課題として掲げられました。今後、日本のいたるところで緩和ケアが行き届き、患者さん一人ひとりのニーズにあわせた適切な治療の実践がますます求められています。

以上

※1 「JPAP®」について:

「JPAP®」は、正しい痛み治療の普及と理解の浸透を目指し、2003年11月に医療従事者が設立した非営利の任意団体です。2010年5月31日現在、2,410名の医療従事者が会員となっています。詳しくは、JPAP®のウェブサイト <http://www.jpap.jp> をご覧ください。

※2 「オレンジサークル」について:

「オレンジサークル」は、“がんの痛みを取り除くことで、患者さんが、がんそのものと取り組む気力や体力を得る”という考え方を実践する医療チームからの登録申し込みに基づき、JPAP®が認定するものです。現在130以上の緩和ケアチーム、600名以上の医療従事者が参加しています。既に緩和ケア活動を展開しているチームの施設内でのアピールをはじめ、緩和ケアチームの立ち上げや、患者さん・ご家族向けの緩和ケアに関する啓発活動などを支援しています。参加チームには、JPAP®のウェブサイトでの病院紹介とともにチームの院内活動をご紹介します。またオレンジサークルスターキット(院内ポスター、認定バッジ、認定ステッカー、オレンジサークル認定証)のほか、ご希望の施設には患者さん向け小冊子をお届けしています。

※3 厚生労働省 平成19年人口動態統計より

<報道関係者のお問合せ先>

JPAP®企画・運営部 広報窓口

ムンディファーマ株式会社

安藤 かおる

Tel: 03-6718-2979 Fax: 03-6718-2351

E-mail: kaoru.ando@mundipharma.co.jp

ターギス株式会社

篠崎雄一郎

Tel: 03-5437-5501 Fax: 03-5437-5503

E-mail: yshinozaki@targis.co.jp